

キャリア教育の新しい試み —学生と共に創る対話型学習キャリア検討会—

Interactive instructional system for career education

石川県立大学 教養教育センター 桑村 佐和子・新村 知子・山岸 倫子
生産科学科 高原 浩之
環境科学科 皆巳 幸也・柳井 清治

1. はじめに

石川県立大学では、キャリア教育の一環として、学生の学習キャリア形成を支援するための専門委員会を立ち上げ、平成 23 年度よりポートフォリオ・システムをスタートさせた。これは、学生たちが在学中の学内外のさまざまな学びを記録し、自分の学びを定期的に点検し、それを通して自分自身の特性等を知り、自律した学習者となれるように支援することを目的としている。それにより、より充実した大学生活を送るとともに、将来の進路選択の際の資料も作ることができれば、と考えている。大学教育にポートフォリオ・システムを導入する例は全国的にも広く見られ、大学独自の冊子を学生に渡したり、Web 上で様式を提示したりする大学がある。また、e-ポートフォリオ・システムの取り組みも盛んになってきている（注1）。

本学では、ポートフォリオ・システムの導入に伴って、1年生が入学してから半年間の自分の大学生活を振り返るための「学習キャリア検討会」を試行することとなった（注2）。学習キャリア検討は、ポートフォリオに保管した学習記録、作品等を用いて、それまでの学習を振り返ったり、意味づけたりする作業であるが、本学ではさらに、学生同士の対話型で進める可能性を探った。具体的には、「ナナメの関係」にある上級生と1年生が、小グループで自分の学びについて話をしたり、質問をし合ったりすることにより、自分の学びを振り返りながらコミュニケーション能力や質問力などを高めていくことを目指した（注3）。実施に当た

っては、この取り組みを「キャリアケン」と称することとした（以下、キャリアケンとする）。

このキャリアケンの実施主体として、委員会の下部組織として教員有志による「キャリアケン実行委員会」を組織し、キャリアケンは1年生全員を対象とした（注4）。

2. キャリケン（学習キャリア検討会の愛称）の実施要領

（1）キャリアケンの概要

キャリアケンは、学生食堂を会場として、表1のような日程で、各学科の1年生を対象として60分間程度で行われた。

表1 キャリケンの実施時間帯

2011年8月9日（補講試験週間最終日）		
第1回	生産科学科	10:00～11:20
第2回	環境科学科	13:40～15:00
第3回	食品科学科	15:10～16:30

先述したように、今回の試みは、学生同士、特に上級生と1年生という関係での対話によって、1年生の学習キャリア検討の可能性を探るものであった。そこで、キャリアケンの場面には、1年生の他に、「キャリアケンリーダー」と呼ばれる上級生がおり、さらに、キャリアケンリーダーの中から、全体を運営する「チーフリーダー」と、グループから外れて全体の運営に気を配る「遊軍」がいた。

キャリアケンの進行にあたって、1年生2～3名を1グ

ループにし、それぞれにキャリケンリーダーを2名ずつ配置した(図1)。



図1 キャリケンの風景

遊軍は、グループに配置されなかったリーダーがつかとめた。その役割は、以下の4点であった。しかし、後に示すように、リーダー達によく理解されていなかったかもしれない。

- ・遅刻してきた学生への対処
- ・グループ毎の人数調整
- ・各グループへの支援
- ・全体を見渡しなが、気がついたことをメモ(次回へ生かすために)(図2)



図2 メモを取る「遊軍」

また、今回は初めての試みでもあり、全学の学生達に注目してもらうために、イメージキャラクターを作成した(図3)。これは、大学院修士課程の院生に依頼して作成してもらったものである。



図3 イメージキャラクター「キャリケン」

(2) キャリケンの具体的な進行

先述したように、キャリケン会場全体の運営は、チーフリーダーが進めたが、各グループでは、その指示を受けながら、基本的にはグループに配置されたキャリケンリーダーが様子を見ながら運営した。各グループ毎の活動は図4のように進められた。また、1年生

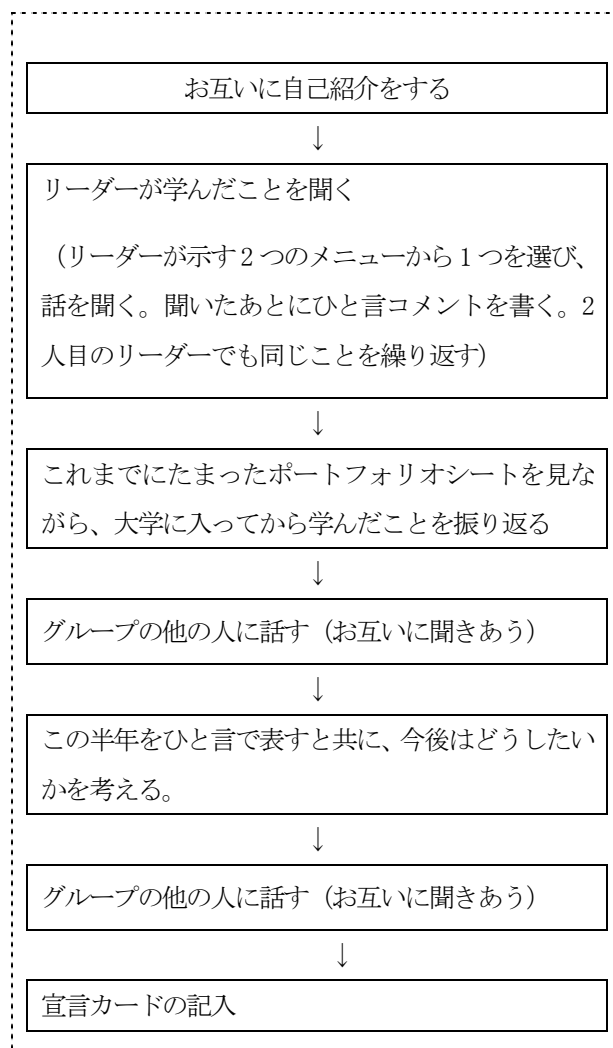


図4 グループ毎の活動

がキャリアケンに参加しながら半期の学びを振り返るツールとして、図5のようなキャリアケン用ポートフォリオシートを新たに作成した。

図5 キャリケン用ポートフォリオシート (1年生用)

年生への情報提供を考えていたところ、学生から、このような取り組みを他の人に知らせる壁新聞のようなものを作りたい、との申し出があった。その後、この学生は教員に相談を持ちかけながら、他のリーダーの協力も得て、4号までの「キャリアケン通信」を作り、全学に知らせる活動を続けた。図6は第1号で、キャリアケンの実施を知らせている。また、図7は第4号で、キャリアケン終了後の1年生の感想を伝えている。



図6 キャリケン通信 第1号

(3) 学生による「キャリアケン通信」の発行

1年生のキャリアケンに対する認知度を上げるために、教員が授業を通して呼びかけたり、直前ではキャリアケンリーダーから直接1年生に呼びかけてもらうなどした。

それだけでなく、さらに学生によるポスター掲示を通しての呼びかけも行われた。キャリアケンリーダー養成講座を進めていく内に、キャリアケンリーダーの一部から、この試みは初めてのことであり、1年生にはイメージがわきにくく、また上級生も知らないために言及することもないなど、期日が近づいてきても知られていないのではないかと懸念が聞かれはじめた。もっともな懸念であり、教員同士でも掲示等による 1



図7 キャリケン通信 第4号

3. キャリケンリーダーの養成

今回の取り組みの特徴は、上級生をキャリアケンリー

表2 キャリケンリーダー養成講座

	日	時間	活動内容
1	5/13	12:20-12:50	顔合わせ。キャリケンおよび養成講座の概要を説明。 小グループで自己紹介し、さらに、それについて質問すること、質問に答えることの練習。
2	5/20	18:30-	MEGU 野々市で懇親会（学生メンバーの自己紹介含む） キャリケン本番の説明、自己紹介など
3	5/27	12:20-12:50	ホワイトボードに図式化して本番のプロセスを説明し、全員の学生からこの方法についての意見をポストイットに書いて貼ってもらう（カードブレインストーミング）。 これによって、お互いの意見や提案、不安を感じている部分などを共有する。（グループなし）
4	6/3	12:20-12:50	1年生へのポートフォリオの説明内容をリーダーに報告。 キャリケンリーダーが提示するネタのその1を小グループで披露して、コメントを出し合う。 3回までに出てきているアイデアを報告し、それについての学生の意見をもらう
5	6/10	12:20-12:50	キャリケンリーダーが提示するネタを小グループで披露して、コメントを出し合う。 それぞれの問題点を話し合う。
6	6/24	12:20-12:50	キャリケンリーダーが提示するネタを2つに絞り、小グループで披露して、コメントを出し合う。 1年生のキャリケン用ポートフォリオシート（案）を使ってみて、学生の意見を聴取
7	7/1	12:20-12:50	キャリケンリーダーが提示するネタを2つに絞り、それぞれネタのカードを作る。宣言カードの検討。 1年生のキャリケン用ポートフォリオシート（案）の再検討。
8	7/7	18:30-21:00	リハーサルその1
9	7/8	18:30-21:00	リハーサルその2

ダーとして配置していることにある。したがって、その養成にも重点が置かれた。まず、キャリケンリーダーの募集については、2年生以上の学生を対象に4月末に説明会を実施した上で、公募した。次に、キャリケン実行委員会は応募してきた学生に対して養成講座を開催し、キャリケンリーダーとして養成した。今回、キャリケンリーダーとして活動した学生は3年生を中心として、学部2年生～修士1年生までの28名である（修士1人、4年生4人、3年生18人、2年生5人）。

(1) キャリケンリーダー養成講座

キャリケンリーダーの養成講座は、計9回、表2のような内容で実施された。最後の2回を除いて、昼休みの30分間（12:20～12:50）で実施した。リーダーには先述のように様々な学年の学生が含まれており、みんなが揃って集まれる時間帯は昼休み（12:10～13:00）しかなかったためである。そのような限られた時

間を有効に使わざるを得なかったため、午後からの授業がない学生を除き、学生達は昼食をとりながら活動した。また、夕方に実施されたときも、アルバイトなどの関係で、第8、9回のうちどちらかしか出られない学生達も少なからずいた。

また、キャリケンは8月9日に実施されており、養成講座最終日の7月8日からは1か月間もあいている。それはその間、キャリケンリーダー達もレポートや試験で忙しくなると考えられ、その時期に養成講座をしないように配慮したためである。しかし、後述するように、本番近くにも集まりたかったなどの声が聞かれた。

(2) キャリケンリーダーとの意見のやりとり

今回、キャリケンリーダー全体では、ほとんどが昼休みの12:20～12:50の約30分しか話をする事ができなかったが、その間に、話をしたり、話を聞いて

たり、といったコミュニケーション能力を訓練することが必要であった。さらに、途中からはキャリアリーダー達からも意見を募ることも多くなった (図8)。



図8 養成講座で話しあう学生達

したがって、養成講座の時間を超えて、教員とキャリアリーダーの意見交換や個別の支援が必要であったが、そのような情報共有・意見交換を補うものとして、第一に、シャトルカードを用いた。書いてもらった内容は、主にその日に行ったことについての感想や意見である。それに対して、教員全員が回覧し、各週の担当を決めてリーダーにコメントを返した。

第二に、全体に向けても、匿名ではあるが、キャリアリーダー達の意見・感想と、それに対する教員のコメントを紹介した。紹介は、印刷された資料の配付によって行う場合もあったが、石川県立大ですでに導入されている Moodle (e-Learnings システム) を通して学生に伝える場合もあった。さらに、一部は、Moodle を通して意見を募ったり、意見交換を行った。

4. キャリケンに対する1年生の受け止め方

1年生の受け止め方を知るために、表3の要領で質問紙調査を行った。なお、生産科学科と環境科学科の調査結果はすぐにリーダーにも提示され、次の学科のキャリケンに生かされた。

表3 1年生に対する質問紙調査

<p>調査目的: 1年生のキャリケンの受け止め方を知り、今後への示唆をうることを目的とする。</p> <p>調査対象: 参加した1年生全員</p> <p>生産科学科で調査票を渡し忘れたグループが1つあったが、それ以外は全員に配付。回答者数は、生産科学科 24人、環境科学科 21人、食品科学科 15人で、全体で60人である。</p> <p>調査方法: 当日の各学科のキャリケン終了後、その場で記入、回収ボックスにて回収。無記名。</p> <p>調査項目:</p> <ul style="list-style-type: none"> ①キャリケンに参加した感想(「良かった」～「良くなかった」の5択) ②①のように答えた理由 ③次回のキャリケンをよりよい活動にするための意見(自由記述)
--

(1) キャリケンに参加した感想

参加者全体では、キャリケンに参加して「良かった」(75.0%)、「まあまあ良かった」(20.0%)を合わせると、95.0%の学生が良いと考えている。(図9)

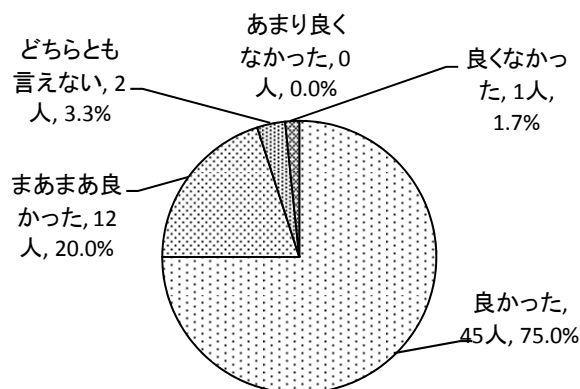


図9 1年生の感想 (全体)

各学科別に見ると、表4のように、環境科学科で「良かった」とする比率は高く、逆に食品科学科で「どちらとも言えない」「良くなかった」とする学生がいた。

表4 学科別にみた1年生の感想 % (人)

	良かった	まあまあ良かった	どちらとも言えない	あまり良くなかった	良くなかった	計
生産科学科	70.8 (17)	29.2 (7)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	100.0 (24)
環境科学科	85.7 (18)	14.3 (3)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	100.0 (21)
食品科学科	66.7 (10)	13.3 (2)	13.3 (2)	0.0 (0)	6.7 (1)	100.0 (15)
計	75.0 (45)	20.0 (12)	3.3 (2)	0.0 (0)	1.7 (1)	100.0 (60)

(2) 感想の理由

上記のような感想を持つ理由をみると、まず「良かった」「まあまあ良かった」と回答した理由として、一番多かったのはキャリケンリーダー（先輩）と話せて楽しかったことである。以下は、学生たちの感想であるが、それぞれ一部を示すにとどめる。

- ・先輩方がすごく話しやすい人だったし、自分たちに身近な話が聞けて楽しかったです。
- ・先輩と交流することができる貴重な機会を得ることができました。また、今回は自分の言いたいことも伝えることができて嬉しかったです。

そのような対話の中から、キャリケンリーダーから今後の大学生活に参考となる意見を聞いた、刺激を受け様々なことに挑戦していきたいと考えている人も多い。

- ・先輩の話を聞いて、2年や4年の忙しさや、大学の大体の流れ、授業、就職についての考えを深められたから。
- ・今後の学校生活の参考になったし、いろんなことに挑戦していきたいと思いました。

そのような中で、キャリケンの本来の目的である、自分自身の半期の振り返りや今後のことを考えることができた学生もいたようである。

- ・先輩の話を聞けてためになったし、自分の前期を振り返っての話もできたから
- ・自分の今後の目標を立てることができたし、先輩の貴重な話を聞くことができたから。
- ・自分を見つめ直すことができたので良かったです。

また、同期の人も含め、他の人と話すことの効果を指摘している人もいる。

- ・他の人の考えを聞く機会が今までなかったから、良い時間になれたと思うから。

- ・先輩の話を参考に、自分の考えをまとめる術を知ったから。

全体を通して、最初は期待していなかったのに、意外にも面白かった、とする人もいた。

- ・行きたくないと思っていたが、来てみると話も面白くて、来て良かったと思った。

一方、「どちらとも言えない」という感想を持った学生は、キャリケンリーダーの話から自分の学びへとつなげることの難しさを指摘している。また、「良くなかった」とする学生の理由は「ひま」とだけ回答しており、興味を持てなかったということではないかと思われる。

(3) 1年生が考える今後の改善点

今後については、このままで良いとする意見も複数あったが、1年生の出席率を上げる努力することを求めている人が一番多く、関連する意見まで含めると12名から意見が寄せられた(全体で23名から意見が寄せられた)。

- ・欠席も多かったが、楽しい活動なので、もっと多くの人が参加できた方が良いと思いました。

その中には、以下のような具体的な提案も含まれている。

- ・思っていたよりためになる話ばかりだったので、もっと“ためになるんだよ”と言うことを伝えた方が良いと思います。来ないと言っていた子が多かったの。
- ・夏休み直前よりももう少し前の時期にして、来るのが普通だと思うような時期にすればもっと人が来ると思う。
- ・全員参加にすればいいと思った。

内容についても、キャリケンリーダーとの話をもっとしたい、ほかのリーダーの話も聞いてみたい、という気持ちがあるようである。

また、緊張する学生もいたようで、改善策としてももう少し狭い空間にすることや、食べ物や飲み物を用意することを求める学生が数名いた。

5. キャリケンリーダーの受け止め方

(1) キャリケンを終えての感想

一方、キャリケンリーダー達はどのように受け止めたのであろうか。多い感想としては、1年生と話せて楽しかった、さらには、逆に1年生から刺激をもらったとする意見であった。

- ・(前略) その(注:1年生の) チャレンジ精神に私が刺激を受けたし、他にもそのような子ばかりで、自分ももっと頑張ろうという気持ちを持ちたいな、と逆に思われました。キャリケンには1年生のために行った活動ですが、私自身がいろいろ考えさせられる自分のためになった活動でした。

実際の運営にあたって、思うようにいったとする学生や難しさを痛感した、という学生達もいた。

- ・今まで準備してきただけ、良い成果が出たのではないのでしょうか。最初は1年生と話が弾んだりするのかな、と思っていたけど、キャリケンの準備中に引き出してあげるのが大事だと言うことを学んだので、1年生が話しやすいことを質問してあげることから始めたら、上手くコミュニケーションが取れました。

- ・最初は人前で話すことがすごく苦手なのですごく嫌で、本番が来るのがすごく怖かった。ネタを見つけて話す練習をしても不安で仕方がなかった。でも、いざ本番になって、1年生と話してみると、みんなすごく気さくで話しやすい!1年生の雰囲気のおかげで安心して話すことができたと言っても過言じゃないと思うくらいに!

一番心配していた1年生のポートフォリオシート記入やお話もみんなすごく沢山書いてくれたのが目に入ったし、話すときも黙り込んでしまう人は本当に少なかった。

質問も結構出たので、1年生にとっても先輩から学校のことや気になっていたことを聞いた良い機会になったんじゃないかな、と思います。

- ・今回リーダーをしてみて、一番雑談が難しいと思いました。間が空いたときの会話を膨らませるの

が大変で、沈黙を何度か作ってしまいました。

これらはごく一部の感想に過ぎないが、それぞれ準備してきたことを発揮して、充実感があったものと思われる。今回は初めての試みでもあり、学生の感覚を取り入れたいとの思いから、学生達と一緒に創り上げてきた、という実感がある。キャリケンリーダーからもそのような感想が寄せられている。

- ・何回も集まって作り上げてきたものなので、とても終わったあとすっきりした。

なお、キャリケンリーダー達は、キャリケン後に、大学から認定証を交付してもらっている(図10)。



図10 キャリケンリーダー認定証の授与

(2) キャリケンリーダーが考える今後の改善点

キャリケンリーダー達からも改善点を指摘してもらったが、やはり1年生の参加者を増やすことに触れるものが多かった。参加者が少ない回は特に残念がる声が多く聞かれた。

- ・日時の設定も考えるべきだと思った。せっかく1年生にとって有意義な会になることを願って練習を重ねても、学科の半数しかこれないんじゃない気がする。

その改善方法として、キャリケン実施の時期をテスト前、あるいは終了前にするなど、夏休みで帰省したり旅行に行ってしまう前にしたらどうか、あるいは今回午前中の方が出席率が高かったことを受けて、キャリケンを午前中に行ってはどうかという具体的な提案

もあった。

また、養成講座のあり方に関しても、実施時期、時間帯、内容への変更を提案されていた。特に時期、時間帯に関しては、教員の配慮が裏目に出ているように感じられたが、反対の意見もあり、さらに検討を要する。

- ・今回、本番が上手くいったので良かったですが、リーダー養成講座に改善が必要だと思いました。時間がないのは避けられない問題ですが、今回のリーダー養成講座は参加すればするほど不安ばかりが増すばかりで、実際にはとても楽しかったのでよかったです。もう少し話し合う時間を増やすことが必要だったかな、と感じました。夕方の話し合いがとても良かったので、その回数をもう少し増やせたらな…と思います。
- ・普段の昼休みの時間は時間通りだったから良かったけれど、夜のリハーサルはちょっと時間が長くなりすぎたかな、と思った。
- ・リーダー養成の期間が長く感じました。テストの関係もあると思いますが、もっと本番近くに期間が空いてしまわないようにしたいです。

この他に、遊軍の役割がはっきりしないことなど、参考になる意見が多く寄せられた。

6. 今後の課題

今回、キャリアケンリーダーによる下級生のための対話型学習キャリア検討会を試行してみたが、全体としてはキャリアケンリーダーは勿論、1年生の頑張りに大いに助けられながら、参加者にとって満足度の高い取り組みとなった。

一方で、課題も明らかとなっている。第一には、1年生の参加率が悪かったことである。1年生からも、キャリアケンリーダーからも同様の指摘があり、何らかの工夫が必要だと思われる。

今回、このような参加状況になった原因としては、以下のようなことが考えられるであろう。

- 単位取得とは関係ないため、不参加の場合のペナ

ルティがない。

- 学生のとまどい。参加してもしなくても良ければ、行かない、という傾向がある。
- 一部学生の意見で左右されたようである。
- 夏休み直前という日程に問題がある。(帰省、旅行に出かけてしまう、あるいは、サークルなどに関係ある全国大会と日程がぶつかる。)
- どのような会になるかの明確なイメージが伝えられなかった。

改善策としては、キャリアケンを必修科目の中に位置づけることが考えられるが、これにはカリキュラム改正を伴う。また時期を学期中に移すことが考えられるが、ポートフォリオシートがある程度たまっていなければ実施できないため、後期に実施することになると思われる。

今後の課題の第二は、キャリアケンでは、ポートフォリオシートを十分に活用することができなかったことである。したがって、本来の意味での、ポートフォリオ評価の一環としての「学習検討会」という性格が薄くなってしまった。

その理由としては、ポートフォリオシートを使った学習の振り返り方法を学生に説明したり、実際に使ってみる時間を設けられなかったことが考えられる。したがって、活用する方法がイメージできなかった学生もいたと思われる。しかし、キャリアケン当日には、学生たちの疲労を考えると時間的拘束をこれ以上長くすることは困難であると思われるため、説明をしたり、振り返ったりする時間はとれない。今後、学習キャリア検討をどのような方法で行うにせよ、その方法の説明をする時間を設定する必要があるだろう。また、できればそれを実際にやってみる(学びを振り返り、学習キャリアについて考える)時間を設けることが必要であろう。

第三に、キャリアケンリーダーの確保の問題である。キャリアケンリーダー達は、この活動を通して成長することができたと感じているようである。特に、今回は試行錯誤をしながらであったため、実際にキャリアケン

リーダーたちの意見も聴くことも多く、教員と共に一緒に創り上げている実感があつたようである。

一方で、そのようなことも影響しているのか、キャリアケンリーダー養成及び当日のキャリアケンリーダーとしての活動に不安を感じていた学生もいたようである。これは、キャリアケンリーダー養成講座のプログラムおよび実施方法の確定によって改善されると思われるが、1年生の参加者が少ない回は居心地が悪かったようであり、キャリアケンリーダー達は3学科続けてであったため、かなり疲れたとの意見も見られた。キャリアケン実施後の今後の意向調査では、キャリアケンリーダーを続けることは検討中とする学生がほとんどであった。キャリアケンリーダーの心身の負担が軽減する工夫が必要であろう。なお、続けられないと答えている学生の中には、就職活動や卒業研究により、忙しい時期と重なることを理由としてあげているものもある。

これ以外にも細かい点については課題が残ると思われるが、1年生のための学習キャリア検討をどのような方法で実施していくのかについて、さらにさまざまな方法を視野に入れて検討する必要があるだろう。

注

1. 本学では、現在のところ、e-ポートフォリオ・システムは導入していないが、一部の教員で検討が始められている。
2. ポートフォリオ評価の場合、その一環として、それまでの学習の記録や作品等から一部を取り出したり、並べ替えたりしながら、自分の学習プロセスと結果を振り返る。その後、指導者と学習者の対話を中心とした検討会を持ち、到達点を確認すると同時に、その後の目標設定をする。(田中耕治『教育評価』(岩波書店、2008)、田中耕治編『よく分かる教育評価』(ミネルヴァ書房、2005)など)
例えば、高等学校で進路指導の一環として取り入れている事例もある。
3. 本取り組みは、大学生が高校に出向いて、経

験を語る「カタリバ」という取り組みを参考とした。(上阪徹『「カタリバ」という授業 社会起業家と学生が生み出す“つながりづくり”の場と仕組み』英治出版、2010)

4. 石川県立大学は生物資源環境学部1学部3学科で構成されており、1学年の入学総定員120名である。

なお、本稿では紙幅の関係で詳細まで報告することができないため、詳細は2012年5月刊行予定の報告書を参照されたい。